「変わる」、「変える」ことへの挑戦

取締役常務執行役員
大井 茂博

2020年度を振り返ると、今までの会社人生の中でも経験したことのない年でした。

2019年12月に新型コロナウイルスの最初の症例が中国で確認されて以降、世界中へのまん延とその影響により経済が一時的に停滞してしまいました。また、働き方も在宅ワークやWEBによる会議の実施など、新型コロナウイルスのまん延防止策の結果、成し得ることができてしまい「やれば出来る」と働き方が大きく「変わって」しまった１年となりました。新型コロナウイルスに端を発した新たな働き方は、従業員である個々人の仕事の仕方を含めた多様性をより尊重すべき時代がまさに到来して来ていることを改めて気付かされました。

一方、地球環境の観点からこの一年を振り返ると、2020年10月、菅内閣総理大臣が「2050年までに、温室効果ガスの排出を全体としてゼロにする、すなわち2050年カーボンニュートラル、脱炭素社会の実現を目指す」ことを宣言されました。世界でも2050年カーボンニュートラルにコミットしている国は2021年4月時点で123カ国・１地域にも及んでおり、その実現の鍵となるのは、「革新的なイノベーション」であることは間違いありません。

地球規模で、人類の環境保全に対する考え方を「変え」、我々の地球を守って行かなければならないという事実。その一つの手段であるカーボンニュートラルの実現には、エコプロセス、エコプロダクト、エコソリューションの三位一体となることが重要であり、エコプロダクトの一端を支えている当社の材料開発技術を本技報でご紹介します。

エコプロセスを製鉄技術という観点から見ると、製鉄技術そのものの変遷期が目の前に迫ってきています。即ち、高炉による製鉄技術の改革はもとより、我々の技術の根幹である電気炉溶解技術の変遷期であることも、また事実であり、高炉各社が高炉による製鉄技術そのものに手を付け、更には我々の得意とする電気炉溶解技術へ変わることをも視野に入れた、製鉄技術の大きな変換を実行しようとしている中、我々は、今、何を成すべきかをよくよく考える重要な時期です。

あの時、高炉法による精錬技術革新が起こり、高炉法で特殊鋼を製造することが可能となった技術革新に気付くことができませんでした。同じことを繰り返さない様に、今、我々が成さなければならないことは、自分自身の技術革新を考える前に、世の中の製鉄技術に関する改革がどの方向に向かい、それが我々の電気炉溶解技術に対してどんな影響を及ぼすのかを熟考したうえで、我々自身の電気炉溶解による製鉄技術を「どう変えていかなければならないか」を真剣に考える時期です。さらに、その変えた技術をも含めて、海外子会社への指導等、エコソリューションを実現するために自身が、自社が「変わる」、「変える」を実行して行くことこそが、わが社の将来の一筋の明るい希望と成るのではないかと考えている今日この頃です。

これからも、皆様方の山陽への一層のご指導、ご鞭撻を宜しくお願い申し上げます。